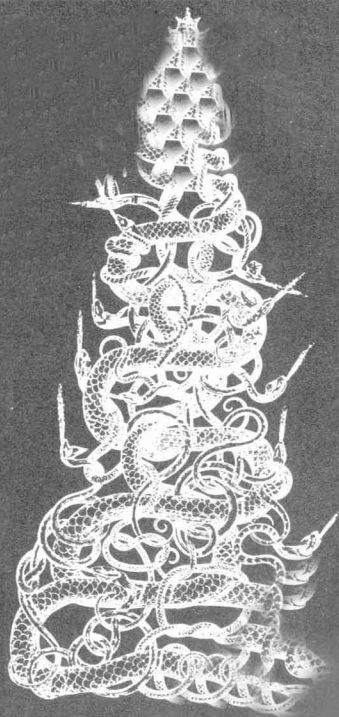


Star ou Ψ de Cassiopée: C.I. Defontenay



紀田順一郎 荒俣宏
責任編集

世界幻想文学大系 20



カシオペアのΨ

昭和五四年六月二五日印刷 昭和五四年七月五月初版第一刷発行

著者——シャルルマーニュIIイシール・ドフオントネー

訳者——秋山和夫

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

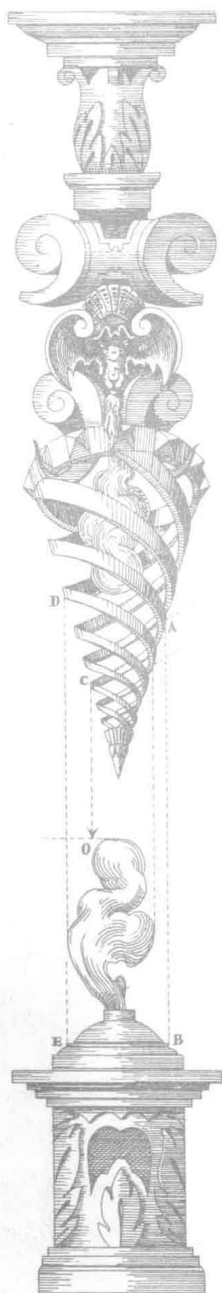
東京都豊島区巣鴨三—五—一八 郵便番号一七〇 電話〇三—九一七—八二八七 振替東京五一六五二〇九

造本——杉浦康平十鈴木一誌 本文挿画——渡辺富士雄

印刷——セイユウ写真印刷株式会社 製本——大口製本印刷株式会社

定価——二、五〇〇円

●—落丁本・乱丁本はおとりかえします



秋山和夫あきやまかずお

一九四七年、埼玉県生れ。

東京大学文学部卒業後、

同大学院博士課程終了。

現在、千葉大学助教授。

専攻、比較文学。

主要訳書——

ノディエ『スマラ』森開社、

一九七四年。

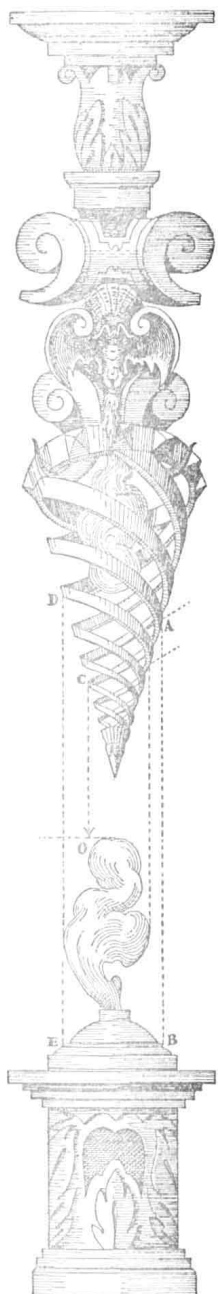
バルベール・ドールヴィイ

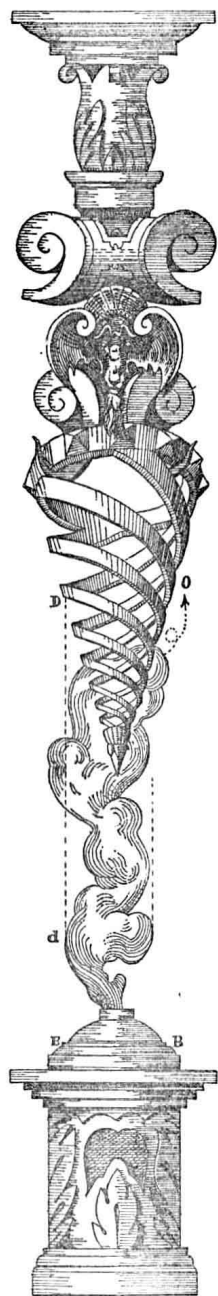
『魔性の女たち』国書刊行会、

一九七五年

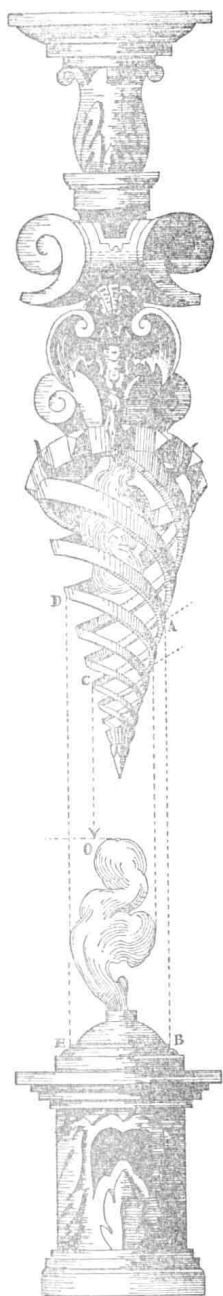
ドレミュー編『青い鳥の虐殺』

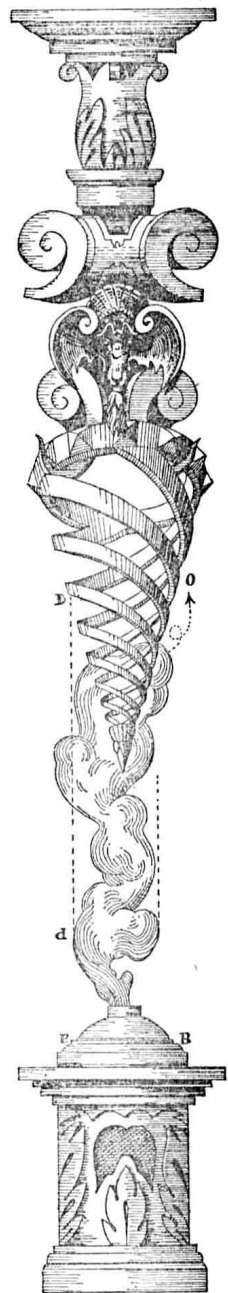
(共訳)、白水社、一九七八年。





カシオペアのΨ C・I・ドフォントネー——秋山和夫訳





目次

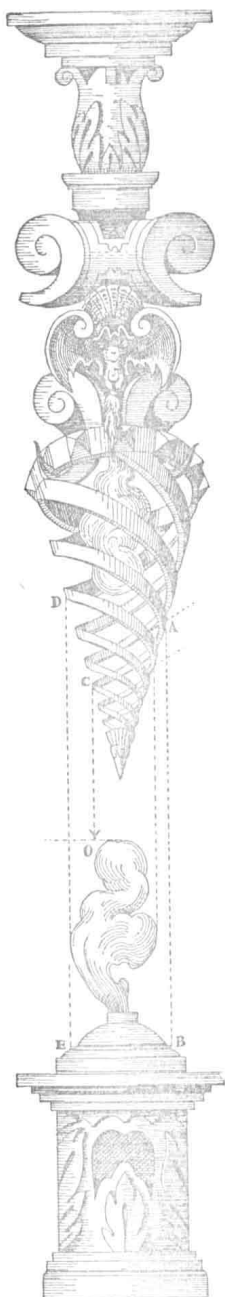
11 — カシオペアのψ C.i.ドフォントネー

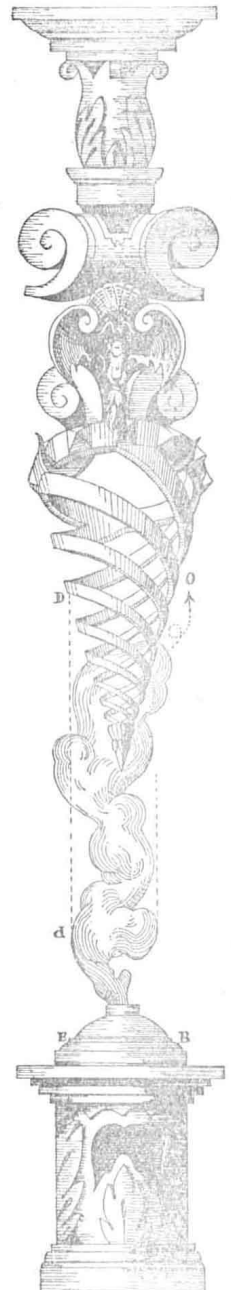
12 — 発端

32 — 発見

40 — スター星の書物

45 — 第一巻—占有ニヨル取得





77 ————— 第二卷———古代史

78 ————— 英雄時代

79 ————— サヴェルス族

84 ————— ポナルバト族

87 ————— トレリオール族

91 ————— ネムセード族あるいは長寿族

94 ————— 緩慢なペスト

98 ————— 自殺

102 ————— 緩慢なペストの下での大虐殺———サヴェルスの詩

112 ————— 自殺———承前

117 — 断章——ルプルゥ族の支配

129 — 第三卷——衛星群

130 — 第一章——タシュル

148 — 第二章——レシュール

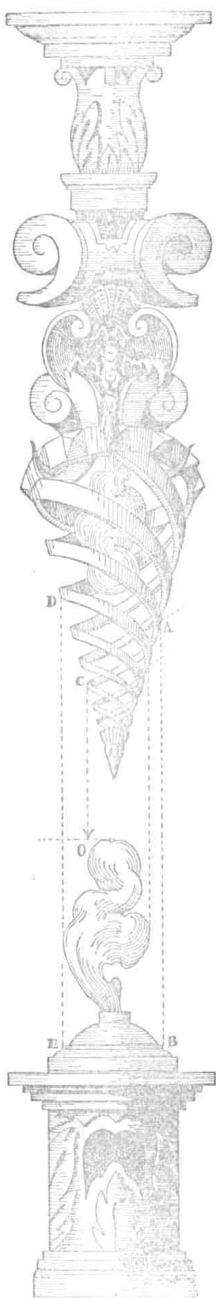
160 — 第三章——リュダール

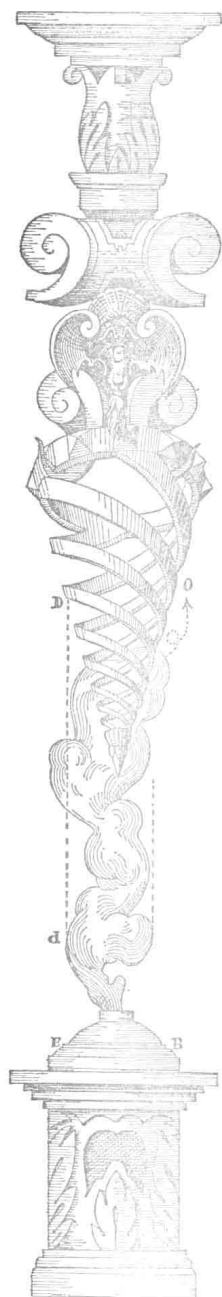
170 — 第四章——エリエール

182 — 第五章——アバール

191 — 第四卷——発程記並びに申命記

192 — ールプルゥ族の降服





193 ——— ニー新国家の創立、新スター人の一般的性格及び社会的本能、文学の再生

198 ——— レジュールに取り残された者たち——一幕劇

222 ——— 三ー新宗教の創基、ネムセードたちの啓示

223 ——— 四ーセールヴェルトの哲学的教説

226 ——— 五ーマリユルカールによる政治制度の制定

228 ——— 六ー社会法の制定とその三原理

230 ——— 七ーマリユルカールの道德原理、彼の墓所

238 ——— 中間の序文

241 ——— 第五卷——タシユル人のタスバール旅行記

262 — セルシノールの樹——一幕劇

290 — エリア——史詩

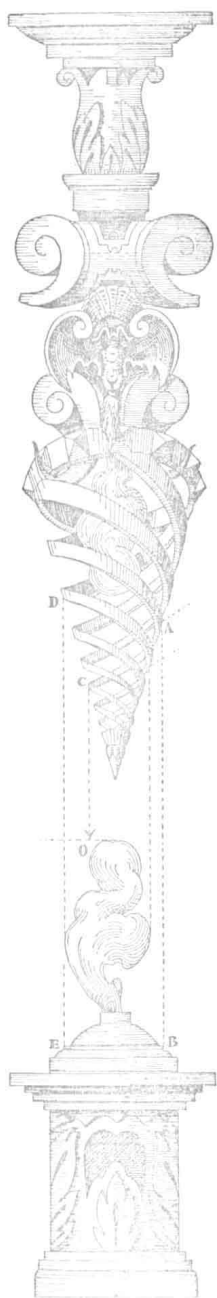
323 — 終章

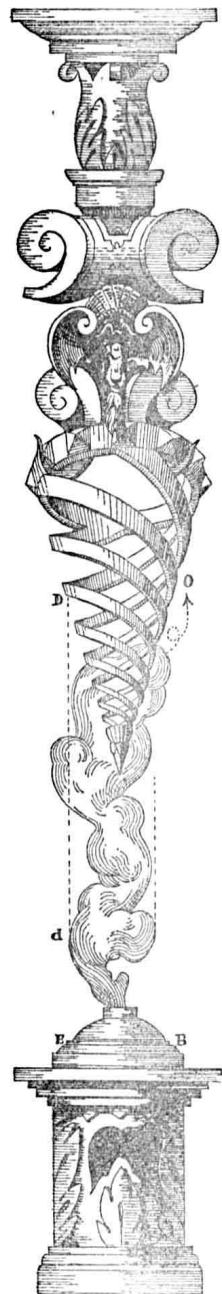
324 — 夢幻の世界

330 — 輪廻の希望

336 — 読者への訣別の辞

341 — ドフォントネーと未来小説——秋山和夫





スター語より翻訳せられたる

スター星系の奇妙なる自然、習慣、旅行、

スター文学、詩、および戯曲。

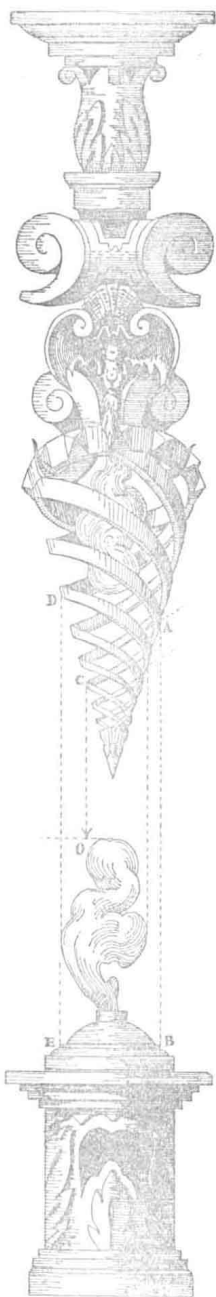
スターあるいはカシオペアのΨ

天空に存在せる様々の世界の一つにおける

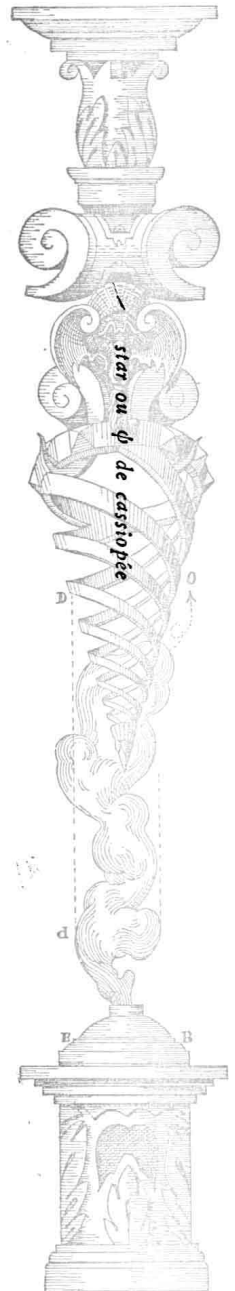
不可思議な物語

ドフオントネーによる

幻想（ファンタジー）



ツネニ、ソノ場で、最モ多ク楽シムベシ



行くがよい！

何故なら既にヒマラヤ

の、最も高き峰々は、われらが

前にそそり立ち、彼方、インドは足下に

あり！ さてこそ往時、婆羅門が、天に

のぼりし彼のみちを、たどりて

われらも、登り行こう

ではないか！

そしてその道案内のインド人は

並び聳える峰々の、あたりに抜き出て

そそり立つ 崇高なたたずまいの岩塊の

一つの頂^{いただき}を指し示すのだった。

すべてのムガール人*1はその前に拝跪し

ヒンドゥー至高の神を

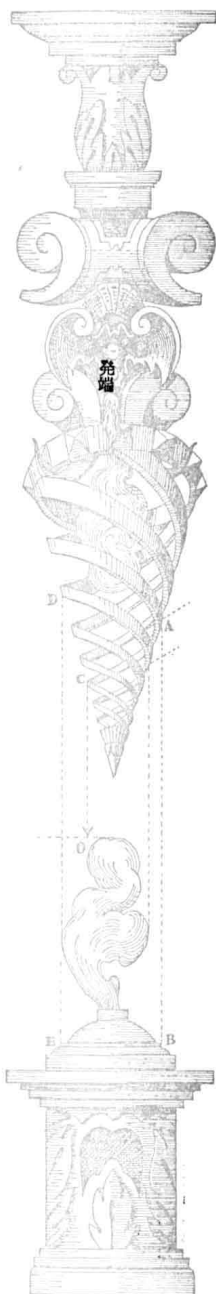
崇めて居ると信じている。

何故ならば、チベットおよびインドの

言い伝えに従えば、インダスを横切り

大理石の城壁ヒマラヤを越えた婆羅門は

*1—モンゴル系のチムール六世の孫バベルは、一五二六年インドに侵入し、ムガール帝国を開いた。一八五七年まで存続したこの帝国は、
回教徒と結んだにもかかわらず、ヒンドゥ教との宥和にもつとめた。



しばしばこの地の岩群の上から
天頂めがけて舞い上がったのである。

3

異存なく私たちの進むその道は
その案内人が示したもの。

一日の行程は疑いなく、

私たちの旅の目的と

彼が示したその峰の

麓へと私たちを導くはずであった。

私たちは数刻を費して越えた、

危険な山道に横臥する数々の雨谷を。

